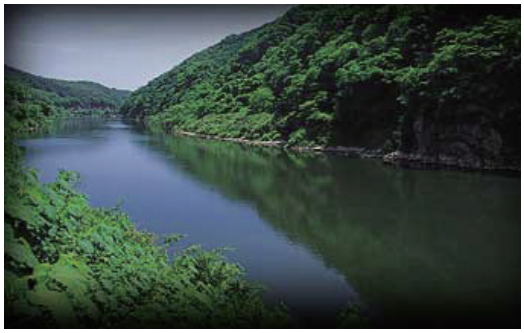
ミニ内航海運史 Ⅵ　江戸時代　その５

各地の河川舟運

⑵ 北上川（岩手県、宮城県）

北上川は、岩手県岩手郡磐手町の弓弭の泉（ゆはずのいずみ）に源を発し、盛岡市、花巻市、北上市、奥州市、一関市などを通って北から南へと流れ、宮城県登米市で旧北上川を分け、洪水防止のため開削された新北上川に入り、東へ向きを変え石巻市の旧北上町地区で追波湾（おっぱわん）に注ぐ一級河川である。流路延長249km、流域面積10,150㎢は東北最大であり、全国でも４番目に入るが、勾配の緩いことが特徴としてあげられる。



一関市を流れる北上川（写真提供：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

また、旧北上川はそのまま南へ流れて石巻市で石巻湾に注ぐが、旧北上川河口からは松島湾を経て阿武隈川河口まで、仙台湾沿いに全長約60kmに及ぶ日本最長の運河・貞山運河が延びている。この運河により岩手県の北上川水系、宮城県の仙台平野の全ての水系、および福島県の阿武隈川水系がつながっている。

盛岡市を流れる北上川（写真提供：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

北上川を利用した舟の交流は平泉文化にも見られるが、舟運が栄えたのは慶安年間（1648～1652）以降といわれている。舟運の発達は、廻米によるところが大きい。江戸幕府の参勤交代令により地方の大名たちは、隔年で江戸で暮らすこととなったが、この間の食糧をすべて自ら調達しなければならず、これが廻米輸送を発達させたとされている。

石巻市を流れる北上川（写真提供：宮城県）

安土桃山時代後期、豊臣秀吉の奥州仕置きによって北上川流域の在地豪族は小田原征伐不参加の咎で、その殆どが改易に追い込まれ、南部信直と伊達政宗が流域を統治することとなった。関ヶ原の戦いでも政宗

と南部利直（信直の子）は揃って徳川家康の東軍に加担し領地を安堵された。これ以降、上流・中流を盛岡藩・南部氏、下流を仙台藩・伊達氏が戊辰戦争で両藩が敗戦するまで統治する事となった。北上川の開発は伊達氏、南部氏による統治によってその幕を開けた。

現在の石巻港（写真提供 ： 宮城県）

南部藩（盛岡藩）は元々、内陸部の多くの荷物を馬や牛で奥州街道を通って江戸に運んでいたが、北上川の開拓により、流域領内の年貢米や穀物を大消費地の江戸や大坂に舟で大量に運び、現金化して藩財政を盛り立てた。特に、北上川と和賀川が合流する奥州街道の宿場町・黒沢尻（くろさわじり＝現北上市）は、遠野や大船渡からの品物も集まり、南部藩の御蔵奉行や川留番所なども置かれた重要な河川港だった。盛岡と黒沢尻の上流は、水量も少なく小型の小操（おぐり）舟が使われ、下流の黒沢尻と石巻は、艀（ひらた）舟で運ぶため、黒沢尻が荷物を積替えるための拠点となっていた。さらに石巻からは千石船で、多くの産物を江戸や大阪に運んだ。小繰船は、長さ約 16m、幅約 2.7m、舟底が浅くつくられ、急流や浅瀬の多い盛岡・黒沢尻（北上市）間で使用され、4 斗 3 升（約 65kg）入りの米俵を 100 俵ぐらい積んでいた。艀舟は長さ約 18m、幅約 5m。黒沢尻で小繰舟の荷を積みかえ、黒沢尻と北上川河口の石巻との間を往復し、4 斗 3 升（約 65kg）入りの米俵を 350 俵ぐらい積んでいた。

現在の塩竈港（写真提供 ： 宮城県）

盛岡藩の舟運の起点は、盛岡城下の新山河岸（しんざんかし＝現盛岡市明治橋付近）で、流域には中継点としての河港もつくられ、地方の産物も集まり、賑わいをみせるようになった。盛岡から石巻まで（200Km）3 ～ 4 日で下ることができたが、流れに逆らう上りは、漕ぐ力だけでは、なかなか前に進まず、場所によっては舟に綱をつけて陸から引いて進めるため、舟引道（ふねひきみち）と呼ばれる細い小道がつくられた。そのため石巻から盛岡まで 14 日と行きよりも、帰りは 3 倍以上の日数がかかった。

仙台藩では、囲米（かこいまい＝幕府や藩により備蓄された米穀）を江戸へ輸送するため、藩主・伊達政宗が改修工事や周辺の新田開発を進めた。近世中期頃の仙台藩領内には、51 箇所もの河岸、または舟場と言われる河港があった。下川原、跡

呂井、六日入などの河川港には、近隣から集められた廻米を一時的に保管し管理した御蔵場も設けられていた。

伊達政宗は、土木に経験の深い長州人の川村孫兵衛重吉（1575 ～ 1648）を召抱え、元和 9 年（1623）から寛永 3 年（1626）までかけて、柳津～飯野川間を遮断し、北上川、迫川（はざまがわ）、江合川の流路を和渕で合流させ、水害防止、灌漑用水を確保するなどの改修工事に取り組んだ。この工事により、南部盛岡からの舟運が可能となり、新田開発も進められ、河口の石巻港は藩米の集積地となって仙台藩、南部藩、一関藩が御蔵を建て、江戸廻米の基地として諸国の廻船と北上川就航舟で賑わい、仙台藩経済の中心地となった。

艜舟（写真提供：岩手県立博物館）

小繰舟（写真提供：岩手県立博物館）

仙台藩は慶長 14 ～ 15 年（1609 ～ 1610）頃から、年貢米の余剰分を藩が農民から買上げる独特の買米制度を導入していた。仙台藩は元々、広大な領地の割合に収入が少なく、財政が困難であったが、産米は他領にみられない良質であったので、北上川を利用してこれを江戸に送って買却し、その利益を藩の財政に入れるというもの。藩は農民に対して春先に買米の前金を渡し、農民は収穫の秋に米を藩に収め、藩が北前船により江戸・深川に廻送したが、米価の相場は農民が受け取る前金の約 2 倍にもなり、藩財政を潤わせたという。江戸深川に集まる仙台米は貞享年間（1684 ～ 1687）に 30 万石を数え、江戸の消費米のほぼ半ばを占め、本石米と呼ばれた。

北上川による廻米輸送の主役となったのは御用穀船と呼ばれた藩の雇い船、渡世船と呼ばれた民間船で、渡世船には役料と称する運航税がかけられ、その管理を肝入という村方役人があたっていた。肝入の主な仕事は、①台帳の管理②配船・運航の監督③事故防止④税の徴収・運賃の支払い⑤修繕・造替えなど、舟運に重要な役割を果たしていた。幕末期には、南部藩御用穀船の小繰舟、艜舟だけでも 90 余艘あり、渡世船をあわせれば 1,000 艘近い舟が使用されていたともいわれ、仙台藩でも艜船 800 隻余と千石船 500 隻を使用していたとされとている。

石巻港を出帆した船は当初、鹿島灘や房総沖を航行する技術がまだ開発されていなかったため、常陸の那珂湊や下総の銚子から内陸の水路と陸路を経由して江戸に物資を運び込んだ。幕府は寛文 11 年（1671）、仙台米の安定的な江戸への搬入のための水路開拓を豪商・川村瑞軒（1617 ～ 1699）に命じ、阿武隈川の水運を荒浜まで確実に通じ、貞山運河沿いの河川港・荒浜から塩竈・浦戸諸島の寒風沢島（さぶさわじま）に船で運び、房総沖を迂回して相模の三崎や伊豆の下田向い、西南風を待って江戸湾に入る航路を開いた。これ以降、仙台藩の廻米はこの航路を辿ることになるが、さらに仙台以北の東北諸藩の江戸向け廻米輸送も、東北の港を北から南へ東廻りに結び、石巻～江戸航路に合流したため、石巻は東廻り海運随一の拠点港として、西廻り航路拠点の酒田とともに東北経済の中心的役割を担うこととなった。

北上川を経て江戸や大阪へ輸送される貨物は、川下荷（かわくだしに）と呼ばれ、米、雑穀、タバコ、紙、漆器、紅花、鉄、銅などがあった。また、江戸や大阪からの貨物は、下り物（くだりもの）と呼ばれ、塩、古衣、木綿、綿、塩魚•干魚類の海産物、さつまいも、蜜柑などがあった。

このように多くの舟が行き来した北上川の舟運も明治時代になって川蒸気船が就航し、一時は藩政時代以上の活況をみせたが、明治 24 年（1891）に東北本線が開通して鉄道が大きな役割を果し、輸送の仕組も変化したことから、舟運は次第に姿を消して行った。

【本稿は、次のホームページから一部引用または参考にしました】
◇国土交通省河川局「河川伝統技術データベース：分類別リスト（舟運）」
http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kasen/rekishibunka/kasengijutsu07-11.html
◇東北地方整備局岩手河川国道事務所ホームページ「北上川ライブラリー」
http://www.thr.mlit.go.jp/iwate/siryou/kitakami_lib/kitakami_lib.htm
◇岩手県立博物館ホームページ「これなあに」「歴史分野」「北上川の舟運」
http://www.pref.iwate.jp/~hp0910/korenaani/h/023.html
◇奥州市ホームページ「みずさわ浪漫」「北上川舟運」
http://www.city.oshu.iwate.jp/htm/roman/fr_rekishi.htm
◇塩竈市ホームページ「浦戸の歴史・瑞軒の道」
http://www.city.shiogama.miyagi.jp/html/kankou/urato/history/ship/zuikenn-tao.html
◇ウィキペディア「北上川」
http://ja.wikipedia.org/